

## 論 説

# アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』, 『彼らもまた立ち上がる』,『草なお茂り』(「エイブ・ サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法

及 川 正 博

### はじめに

1994年『すべての幸運を得た男』でブロードウェイ・デビューを果たす前に、アーサー・ミラーは9篇の劇を書いている。それらは、『悪人ではない』(1936),『彼らもまた立ち上がる』(1936),『暁の優等卒業』(1937),『大いなる反抗』(1938),『草なお茂り』(1938),『聞けよ、子ら』(1939),『黄金の時代』(1940),『半橋』(1943),『四つの自由』(1942)である。これらはいわゆるタイプ原稿で、このうち『黄金の時代』は1989年『すべての幸運を得た男』とともに単行本として発表されたが、他の作品はいまなお大学や公立・国会図書館などに保管されている。『悪人ではない』は文字通りミラーの処女作で、彼自身この作品について次のように説明している。

My first play, *No Villain*, using members of my family as models, was the story of a strike in a garment factory that set a son against his proprietor father.<sup>1)</sup>

次の『彼らもまた立ち上がる』はその改作であり、『草なお茂り』は『彼らもまた立ち上がる』の改作である。こうして同じ内容の作品が三作生まれた。これらはその主人公の名にちなんでミラーのミシガン大学時代の劇作術クラスの担任であったケネス・ロー教授によって「エイブ・サイモン家族劇三部作」<sup>2)</sup>と呼ばれている。これら三部作の時代背景は1929年大恐慌直後の30年代の大不況期であり、当時その煽りを喰らって倒産したミラーの父親が経営していた衣服製造工場が、そのモデルとなった極めて自伝的な作品群であることがわかる。

ミラーは1980年に『アメリカの時計』を発表した。彼はこの作品でまたこの30年代の大不況時代に立ち戻り、驚いたことに、またしても当時のミラー家を思わせるボーム家を登場させたのである。こうして、大恐慌と30年代の大不況は、決してミラーの脳裏から離れることの出来ない一大体験であったことが窺い知れる。事実、当時、少年であったミラーにとって、

1929年10月24日のニューヨーク株式市場大暴落は、彼の精神形成に重大な影響を及ぼしたのである。当時を振り返ってミラーは次のように述べている。

Until 1929 I thought things were pretty solid. Specifically, I thought like most Americans that somebody was in charge. I didn't know exactly who it was, but it was probably a businessman, ..... Practically everything that had been said and done up to 1929 turned out to be a fake. It turns out that there had never been anybody in charge. What the time gave me, I think now, was a sense of an invisible world. A reality had been secretly accumulating its climax according to its hidden laws to explode illusion at the proper time.<sup>3)</sup>

この大恐慌と大不況への思い出が、彼に都合4篇もの自分の家族をモデルとした劇を書かせた最大の理由であったのは間違いなからう。

本稿ではミラーの家族劇の基となるこの自伝的「エイブ・サイモン三部作」を取り上げ、それらの内容を詳細に検討し、作品相互間に見られる劇作術の発展とその特色、そこで展開される資本家と労働者の対立、さらにミラー特有のテーマとなる「父親と息子の葛藤」について、同じテーマを持つその後の作品との比較を交えながら、アーサー・ミラーの劇作家としての原点を考察する。なお、今回使用したタイプ原稿は、ミシガン大学図書館所蔵の『悪人ではない』とテキサス大学（オースチン校）のリサーチ・ライブラリーに保管されている『彼らもまた立ち上がる』と『草なお茂り』である。<sup>4)</sup>これらはどれも未発表劇であるため紹介かたがた、以下やや詳しくプロットに沿って検討を進めていく。

## 1. 『悪人ではない』

『悪人ではない』はミラーがミシガン大学二年生の1936年3月、春休みに一週間足らずで書き上げたタイプ原稿60ページ三幕八場を擁する彼自身の文字通り、処女作である。ミラーは大学内に儲けられたホップウッド賞のドラマ部門に応募して、この作品のみごと賞を獲得し賞金250ドルを手にした。因みに、この賞はこの大学出身で劇作家として成功したアベリー・ホップウッドが残した基金を基に設立されたものである。『悪人ではない』は大恐慌直後30年代のニューヨーク大不況期を背景に、エイブ・サイモン（55歳）が営む衣服製造工場でのストライキと経営者としての中産階級意識の持ち主である父親エイブと労働者側を弁護する社会変革意識の持ち主で次男のアーノルド（19歳）、作家志望の文学青年だが今は父親の家業を手伝っていて、両者の板挟みに苦悩する長男ベン（33歳）を巡って展開する。他の登場人物は、妻のエスター（50歳代）、長女のマクシン（13歳）、エスターの父（70歳）、裕福な会社経営者のサム・ロスと年頃のその娘ヘレン、それにサイモン社の使用人など大人数である。

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』(「エイブ・サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法(及川)

第一幕は深夜近く、ニューヨーク郊外にある四部屋だけの小さなサイモン家の居間で大学からヒッチハイクで帰省するというアーノルドをサイモン家の四人が待っているところから始まる。この四人は、ラジオのボリュームを上げて音楽を聴きながら兄をくすぐったりする甘えん坊のこの家の娘マクシン、そのラジオの音のことで近所を気にし、到着の遅いアーノルドを心配する母親エスター、その彼女にアーノルドは親の窮状を知って帰省費をせびれなかったのに、こちらから金を送ってやればよかったのに、と愚痴を聞かされるエイブ、同じくエスターにバスの発着所に電話してアーノルドが乗ったかどうか確かめるよう催促されるベン達である。人の気配がして一同、緊張するが、入ってきたのはこの家に同居するエスターの父である。実は、エイブは彼のことを快く思っていないらしい。

やがてエスターが本当に心配しているのは、アーノルドが共産党紙に論文を書き一緒に書いた連中が退校処分を受けたことだと言う。共産主義に無知なエイブにそれを説明するベンは、弟がそれに走るのも変革が必要な時代のなせるわざだと言って、彼に理解を示す。話題が大金持ちの会社社長で会社を継ぐべき息子のいないサム・ロスに及び、両親はベンにロスの娘ヘレンとの結婚を勧める。しかし、ベンは彼女に好意は持てないと言う。そうこうしているうちにアーノルドが帰宅し、一同、喜び合いケーキとコーヒーで祝うために食堂に行く。独り取り残された祖父は神に感謝の祈りを捧げる。

第二幕第一場は、翌日のサイモン会社の工場が舞台である。布地の見本を見せに来る人とのやり取り、ストライキ時の商品配達を巡る画策、会社の最大の顧客の一人ドーソンとの取引などから、エイブの時代遅れの商売振りが描かれる。この場面で最大の山場は、ストライキ中に注文商品を何とか配送しようと画策するエイブとそれを不可能だと主張して阻止しようとするベンとの対立であろう。エイブは発送係のフランクとベンにむりやり注文品を届けさせようとするが、案の定、7番街の何千と言う発送係のストを目の当たりにして帰ってくる。

What d'y' mean? What's it my business. My shipping clerk ain't out on strike. My business is to deliver orders. (Act II, Scene I)

怒るエイブをたしなめているところへ、さらに、フランクがついに会社を去ったニュースが黒人のエレベーター・ボーイから伝えられると怒り心頭したエイブはベンに次のように言い放つ。

What's the matter he couldn't carry two boxes himself? I tell ya. Let's (measuring out a space with his arms) let's make him an office for himself and hire another boy to pack. (Pause) By God go back to school again and write poetry ..... I'll be goddamned if there ain't something wrong with you! (Act II, Scene I)

エイブとドーソンとの取引の場面では、エイブはドーソンから翌日までに250着納入を強引に約束させられ、それを知ったベンが非難すると、エイブは次のように激しく反論する。

If you don't get them they'll get you. You gotta be on one side or the other in this business.

In any business. Nobody wants for you. It's dog eat dog. You oughta know that by now. (Act II, Scene I)

事務室に入ってベンは、家に電話しアーノルドの応援を仰ごうとするが、彼はソファで眠っていて当てにならないことを知るが、同時にエイブも家に電話したことを知る。意気消沈しているエイブは、自分の時代には父親が助けが必要な時に助けが得られたのに、今日じゃ、子供達を大学にやると、頭を使う仕事を見付けて出て行ってしまおう、と愚痴をこぼす。

第二場は元のサイモン家に戻り、時刻も第一場と同じである。この場面はエスターとアーノルドとの生き方の違いを巡る対立が展開される。舞台はエスターが第一場のベンからの電話に応じているところから始まる。ソファの上で眠っていたアーノルドが目を覚まし、エスターは彼に父親の会社の古いローンの支払い期限が明日であること、新しいローンの工面に関して心配していること、アーノルドの学業を立派に応援したいことなどを涙ながらに打ち明ける。心配には及ばないと慰めるアーノルドは、この不況の世の中には大きな変革が必要だと説く。これに対して努力でこの難関を切り抜けるべきだと諭しながらエスターは、父親の所へ行って荷造りの手伝いを行うよう勧めるが、アーノルドは黙って考え込む。居たたまれなくなったエスターは思わず胸につかえていた一件、すなわちアーニーの共産主義への傾倒を非難する。アーノルドはこれに対して「黙ってよ」と怒鳴り返すだけである。

第三場は同じ夜の八時十五分頃で、サイモン家が舞台。エイブは帰ってくるなり、今日、大口の注文が入ったので、去年以来の在庫も一掃されるとすこぶる機嫌が良い。父親の会社の経営状態や自分が親父のところで働くことをどう思っているかと尋ねるアーノルドにベンは、事態の急迫ぶりと親父は当然アーノルドの応援を期待している旨を述べる。

Arnold: What does Pop think?

Ben: I don't know what he's going to do. He doesn't know, but tomorrow, if they see we still haven't delivered the goods, the bank'll close us up. If I could show them we were getting stuff through they'd extend the time and renew the loan ... it's a big season but we haven't been getting our share of it. But we might be able to make it all back and then some if they let us keep going.

Arnold: He wants me to come down?

Ben: Of course he wants you to come. He always wanted us down with him. Simon and Sons, that's his dream.

Arnold: So why doesn't he ask me?

Ben: He's afraid he doesn't understand something which we do. A boss's son to him is a boss's son, the duty is only single ... with him it's only single ... I think he's afraid he'll be walking into something dark and deep, something he doesn't

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』(「エイブ・サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法(及川)

understand, if he asks you to come to work ... He's a funny guy ... Pop ... he's got such a deep love and he doesn't want to lose it. (Act II, Scene III)

これに対して、当然、アーノルドは親父のところで働くことは労働者に対する「裏切り」(スキャップ)行為だと答えるしかない。最後に、舞台外で祖父の徒食を巡ってエイブとエステーの言い争う声が聞こえ、その直後に「父さん」と悲鳴をあげるエステーの声に、ベンとアーノルドが大急ぎで駆けつけて行くところで幕が降りる。

第四場はその夜遅く。祖父は前場でエイブとエステーの口論を聞いて心臓発作を起こし、医者と看護婦に付き添われている状態である。エステーもショックでヒステリーに陥り、同じく医者の看護を受けている。一方、ベンはアーノルドに会社の窮状を訴え、工場で働くことを主張し、思わず彼を「臆病者」呼ばわりする。だが、アーノルドは頑として聞く耳を持たない。

第三幕第一場は翌朝のサイモン会社の工場が舞台である。エイブがベンと一緒に注文品の配達を依頼するが、ベンは工場の労働者の中から志願者を捜して配達させることを提案し彼らに相談を持ちかける。しかし、誰一人乗ってくる者はいない。結局、ベンは一人で両手に箱を持って工場を出て行く。第二場はしばらく時間の経った同じ工場内。配達に失敗して帰ってきたベンにエイブが意気地なし呼ばわりをし、自分が彼の年にはこんな風に手を引いたりしなかったと毒づく。ベンがたしなめているところへ、製造業者信託銀行から使わされた男が、配達状況を調べにやって来る。エイブは今現在、大量注文があり、もう一日待ってくれるよう頼むが断られ、会社は危機に直面する。そこへ折りしも祖父が亡くなったとの知らせが届く。第三場は通夜の場面で夜遅いサイモン家が舞台である。サム・ロスと娘のヘレンが駆けつけ、ロスはエイブとエステーに悔やみの言葉を述べた後、ベンに向かってヘレンとの結婚を通じて会社を継いでくれるよう懇願する。これには「残念ですが」ときっぱりと断りの言葉を述べ、彼はロスとヘレンに退場してもらった後、両親に向かって次のような自己主張と将来への希望を披瀝する。

For us it begins, Army and I. For us there begins not work toward a business, but just a sort of battle ... sort of a fight ... so that you'll know that this (covers the scene with an arc motion of his hand) this will never be in our lives. We'll never have to sit like you sit there now for the reasons you are sitting there ... Dad, now we not only are working people ... we know we are ... I couldn't start this thing over again. I've got to build something bigger ... Something that won't allow this to happen ... it's the only way, Dad ... it's the only way. (Act III, Scene III)

『悪人ではない』には、これといった登場人物間の対立や葛藤が見られず、これがこの作品の最大の弱点と言ってよいだろう。ミラーも、これに気付いてか、すぐにこの作品の改作に着

手し、1937年に全く新しい装いの『彼らもまた立ち上がる』を書き上げることになる。『悪人ではない』の他の欠点に関してさらに言えば、不必要と思われる登場人物の存在や無理に主要人物の性格的發展を追うあまり、不自然に設定された場面が少なからず見られた。こうした欠点にもかかわらず、この劇はアメリカ30年代の不況期の真っ只中で苦闘する中小企業の家族をリアリスティックに描き、ミラーの後期の家族劇の原型として捕らえた時、大きな意味を持つ。ともあれ、この作品はホップウッド賞を勝ち得、ミラーはそれを励みに、さらに完成された作品にすべく次作『彼らもまた立ち上がる』へと書き直しを決意したと考えられる。さらに、この作品で描かれた衣服製造工場は、先にも述べたように、ミラーが小さい頃から知っていた父親の職場であり、格別の思い出もあったことだろう。

## 2. 『彼らもまた立ち上がる』

『彼らもまた立ち上がる』は前作より二場減って三幕六場となり、登場人物も35名から26名に縮小された。この劇もオリジナルと同じ衣服製造工場が舞台となっているが、ミラーはプロットにおいて重要な改変を行っている。改変の中で最も注目すべきところは、父親エイブと母親エスターの役割であり、これはこの後の作品の原型となるものである。両者は前作よりもより人間的になったが、エイブと対立するエスターは『悪人ではない』のエスターよりもより悪態をつく妻に変貌している。さらに、エスターで気付くのは、彼女が一家の確執の中で道徳的な責任を引き受けているところである。前作では、彼女とアーノルドとの対立は、さほど大きなものではなかったが、実はその対立は、その作品の中心テーマと呼んでもよい位であった。事実、息子アーノルドに対して母親は、リアリスティックに反応していたが、父親の方はそうではなかった。ところが、今度の改作では、エスターのリアリスティックな面は減じられ、家族内での母親としての立場も消滅している。改作では、彼女の女性としての心理を描く代わりに父親と息子の葛藤がより鮮明に描かれていると言えよう。

前作の最終場面をさらにもっとリアリスティックするために、ミラーは『彼らもまた立ち上がる』では、最初から意図的にエイブをもっと寛大な人物に仕立て直した。今や彼は、労働者階級のニーズを理解し、彼の工場の労働条件も改善した。彼には以前の富も大した意味を持たず、エスターの心の中で誇張されるだけであり、社会的地位も従業員と近くなった。エイブは、家族にもセールスなどに関して嘘をつくこともなくなった。『悪人ではない』に見られた反宗教色も薄められ、ユダヤ的価値観がエイブによって語られている。しかしながら、エイブの性格を変えた反面、エスターはその分好ましからぬ人物になった。『悪人ではない』における彼女の支配的な役割は、『彼らもまた立ち上がる』では、喧嘩早いアウトサイダー的な存在に成り下がっている。当初、ミラーはエスターを前作の時よりももっと魅力的な人物にしようと意

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』(「エイブ・サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法(及川) 図していたと思われる。事実、第二幕二場すなわち彼女がアーノルドに声を荒げるシーンを省略し、エスターのヒステリーに関する言及を省いている。これによってエスターの描写がさらに良くなったわけではないが、彼女のヒステリーを省くことで、ミラーはかえって彼女の母親としての存在を影の薄いものにし、さらにその思いやりをも消滅させてしまった。ただ、エスターは幕開きのシーンでは、その強情さを維持しており、最終幕まで新しい倫理観に組しない唯一のサイモン家の人間として留まる。すなわち、エイブは、最終的に新しい生き方を選ぶので、エスターが現状を踏襲する唯一の人間となる。しかし、『悪人ではない』のベン同様、彼女もエイブからの受け売りのセリフをここここで吐く姿が見られる。

二つの劇の幕開き場面は、ほぼ同じだが、『彼らもまた立ち上がる』でミラーは、若干新しい要素を付け加えている。これは、息子をより力強い人物にするためのミラーの戦略であろう。これを実行するために、ミラーはエイブを息子の味方とし、またエスターとエイブの商売がたきをより悪者にした。改作では、エイブは以前よりも収入が多くなり、エイブと彼の商売がたきルー・ハーシュとの比較もなされている。ベンはエスターにハーシュの犯罪的行動と最近の投獄について語る。ベンは「それでハーシュの妻がミンクを着て、次から次へとブリッジ遊びに興じることが出来るのさ」(Act I, Scene I)と言う。エスターは彼の無実を申し立てるが、ベンは次の様にその顛末を語っている。

Oh, there's still one or two things you don't know, Mother. And I bet when they call his wife to bridge, she says (falsetto) 'Oh, I never thought my Lou could do such a thing.' As though she had merely been sitting on her can and he thrust bracelettes and fur coats and an apartment like that on her. Oh, no, she didn't have anything to do with it. (Act I, Scene I)

このベンとエスターの対決は、二つの理由で重要である。まず、エスターの母親としての責任が間接ながらも明確に提示されている。第二に、エイブ・サイモンが最初から犯罪性があり、しばしば残酷な行動の背景の下に位置付けられていることである。『悪人ではない』で描かれた商売上の犯罪は、ミラーにとってやや曖昧な悪の様相を帯びていた。『彼らもまた立ち上がる』では、犯罪が明確な形で描かれている。ミラーは告発を有効にするために名前、歴史や行動をも活用している。ある契約者が重要な製造業者のために雇った二人のギャングの一味が製造業者の集会に参加したり、エイブの友人のロスが金欲しさのためにエイブを裏切ったりという設定が施されている。こうした人々に対して、エイブは、自分の小さなファミリー・ビジネスを守るべく闘うのだが、これは高貴な行為として描かれている。

『彼らもまた立ち上がる』で、エイブ・サイモンは労働者の状況を理解し、相変わらずボスとして登場するが、彼の工場でストライキを先導するフランクは、一介の労働者の存在ではなく、エイブの親密な友達として登場する。エイブは、フランクの友情を大いに頼りにして、ベンがなぜフランクはスト破りしないのかその理由を説明すると、意気消沈する。そして彼はそ

の落胆振りを実際の行動で示すが、それは善良なものであり、劇中ずっと彼の性格を示すものとなっている。エイブはまた近づき易い存在にもなっている。アーノルドは、父親に対し何の恐れもなく対等に話すことができ、エイブもそれに応対する。エイブは、前作よりもさらにリベラルな考え方の持ち主となり、それは必ずしもアーノルドのアイデンティティへの脅威とはなっていない。

Abe: All I know is when ya got orders to ship, ya ship!

When ya got sons, they help ya. To you, all you want ... all you like is your ideas ... well this business is also an idea ... it's also like something ya see big ... it's mine ... I made it ...

Arn: I know, Dad, but it isn't yours. You're not a boss ... What do you own? You own the right to be a club for the men who have millions at stake. (Act II, Scene I)

このセリフの後、もう一人の衣服請負人のリーボウィッツが、沈痛な面持ちでエイブの工場にやって来る。彼はシャフトという大手製造会社から受けた注文に対する口利き料を払わなかったために与太者に暴行され手の骨を折ったのだった。リーボウィッツのような小粒の請負人にとって、エイブはユダヤ人の「正直者」としてリーダー的な存在である。したがって、リーボウィッツは、彼のところへ何かと相談に訪れるのだ。

リーボウィッツの状況を見てエイブのビジネス界への考えもぐらつく。エイブは一瞬、落ち着きを見せるものの、彼の虚勢もほんの上辺だけである。彼は明らかに落胆しており、ベンに向かって衣服製造業者の会合でスト破りの連中をどう扱うかについて意見を述べることもできない。「かつては自分で自分のビジネスを取り仕切り、誰も邪魔する者などいなかった」(Act II, Scene I)と言う。ベンはスト破りを使いたくないが、エイブは自分の無骨な個人主義が危機に陥っていることをほのめかす。エイブはベンに次のように言う。

What's the difference if you want or you don't want? Nobody asks ya now-days, nobody asks you. All ya do nowadays is stand and they push ya. All ya ... all ya ... all ya gotta do is stand and things happen to ya. (Act II, Scene I)

『彼らはまた立ち上がる』で、エイブは『悪人ではない』の最終場面で陥った状態に、もう作品半ばで到達している。絶望で前作は終わったが、改作では絶望がエイブを奮い立たせ、己のビジネスを救うべく残された唯一の選択に駆り立てる。彼は金を借りねばならず、この財政的危機においては、ロスが唯一の頼りである。ロスは貸す気を示すものの、ベンが彼の娘ヘレンと結婚すればという条件を付ける。このヘレンとベンの結婚に関して、『悪人ではない』では、最終場面に話が具体的になるよう音頭を取ったのは、ロス自身でありエイブはただの傍観者であったが、『彼らもまた立ち上がる』では、ミラーはもっとドラマティックに仕立て直して、エイブをもっと能動的に関らせている。『悪人ではない』では、ヘレンは最終場面だけに

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』(「エイブ・サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法(及川)登場し、セリフもほんの一行だけであるのに対して、『彼らもまた立ち上がる』では、彼女は第一幕から登場している。ベンを取るか、ビジネスを取るか、コトはそれほど単純であり、ベンも自分に何が期待されているかをすぐに理解する。エイブは、このことでベンに次の如く釈明する。

Ben, I gave my life to this business ... a whole life I gave ... it ain't right it should end like this ... it ain't right I should give a life like that and ... and it should be wasted. Ben ... one dream I got since I was a boy ... since the time I was a boy stitching collars on the east side for three dollars a week. One idea I keep ... my son ain't gonna struggle like I had a struggle ... Ben I ... I wanna leave ya with a ... with a name ... with a clean name and a ... and a healthy business. (Act II, Scene I)

エイブは、遺産としてベンに残そうとしている自己のビジネスと「汚れのない」名前とが、実は「まやかし」であることを彼自身うすうす気付いている。というのも、エイブは受話器を取ってロスに電話し、彼の申し出を素直に受けることが出来ないからである。電話をかけるのはベンであり、その時の彼の電話の会話は、たいへんアイロニーに満ちている。彼は電話でロスに「皆、元気ですよ」(Act II, Scene I)と言うのだが、その実エイブがドアから電話中の相手に聞こえる程の声で泣いているからである。礼儀もわきまえず、エイブは己の責任を果たすことが出来ない。『彼らもまた立ち上がる』で、ミラーはこの父親としてのエイブを激しく告発する形で描いている。というのも、エイブは自分よりも息子の名誉を犠牲にするからである。

道徳性に欠けたエイブの弱い性格は、『彼らもまた立ち上がる』でも前作と同じように描かれるが、それは特に後半の幾つかのクライマックスのシーンで見ることが出来る。息子の父親に対する激しい感情の爆発は、後のミラーの作品群で見られるミラー独特のものであるが、この作品ではまだ見られない。エイブはスタイン爺さん(『悪人ではない』では、パーネットと呼ばれている)と言い争う。なぜならば、スタインはエイブがビジネスに疎く、家族を養う知恵もないと見なしているからである。爺さんがエイブは全然なっておらず、今後も希望など持てないと言うと、ついにエイブの堪忍袋の緒が切れる。彼はスタインの胸を激しく押すと、スタインはよろけてそばのソファに倒れこむ。喘ぐスタインを見て、彼は自分のしたことに驚き立ち尽くすが、他方、他の連中は、老人の介護におおわらわとなる。

エイブのスタインに対する責任感が、こうして明らかにされることとなった。『悪人ではない』では、この点はあいまいで、エイブとエステーの舞台外での口論が、老人の心臓発作を誘発させたことが暗示されている。改作では上述のエイブの暴力的行為が、義父の死の直接的な原因となる。もちろん、ミラーは皮肉にも間違った人間を正しい理由で殺したことになるが、息子がコトの真相を知るのには、長い時間がかかることになる。後年の作品、たとえば『みんな我が子』などで、ミラーは息子が父親に対して振るう暴力まがいの行為を描くことになるが、

ここでは暴力は父親の非道徳性に対する息子の打ちひしがれた理想主義および父親に加えるべきだと息子が考える懲罰の象徴となる。しかし、これはミラーの後の作品群に登場する息子達が発見するように、自分達も実は父親を裁くほど善人ではなく、父親に打ち鳴らした警鐘も自分達にも向けられるべきものなのだ。

ミラーはエイブの人物描写に修正を加えるため、彼がうまく切り盛りしているとは思えないビジネスの醜悪な背景を詳細に描いている。この劇のためにミラーが設定した重要な場面の一つは、彼が特別に加えた衣服製造業者組合の会合である。ベンは大規模製造業者が200人位の凶徒を雇うプランに反対する。エイブはこれをなだめ、もし大多数がスト破りを雇うことに賛成するのであれば、それを支持するが、ユダヤ人の商売人としてギャングを雇うのだけは反対だと言う。

I say maybe it's honest for the steel companies to work this way, but it ain't the way for Jewish men to act ... Jewish men in the cloak business. That's all I gotta say. But I hope, so that I can keep my respect for all of you ... I hope you ain't gonna do this. (Act II, Scene II)

このセリフはエイブの立場を正当化するものではないが、彼が要するに言いたいことは、自分は明白な組織悪との協力には、関係したくないということである。彼のこの決定は断固とした道徳的立場のように思えるが、これは実のところ他人指向型思考の一つのバリエーションに過ぎない。『悪人ではない』のエイブ・サイモンは他人がどう考えるかを心配するが、『彼らもまた立ち上がる』でも、その態度はさほど変わっていない。ユダヤ人が行動する流儀に自分を合わせるというエイブの態度は、礼儀と同時に社会的な体面にも彼が神経を使っていることを如実に表している。

事実、エイブを正当化するのはベンである。ベン是小規模な衣服製造業者を擁護する。彼は彼らには二種類あって、収入が5,000ドル以下のものと75,000ドル以上のものがあると知っている。「小粒の人間」は天使ではないなどとベンは思わないが、「人間落ちる所まで落ちれば、底が何であるか位、嗅ぎ分けることは出来る...我々はあんたがたが我々に殺して欲しいと望む人間達と大して違わないのだ」(Act II, Scene II)と言う。組合がスト破りに人を雇うと決定すれば、皆を「殺人者」と呼んで会合を終わらせるのはベンなのである。

ミラーは前作で暗示の程度にとどめておいた真の友情の欠如という主題について改作では、それをはっきりと劇化している。両作品とも、エイブが商品を配達できなかったため彼のビジネスの破綻で結末を迎える。パイヤーはすべての衣服製造業者に同じ注文をするが、ストが始まる前に配達可能な商品の受け取りを望む。『悪人ではない』のプロットは、劇が始まっている段階でエイブがすでに破滅の危機に直面している事実を幾分、曖昧に描いている。この異例なストによって、彼が通常時には決して受けない幾つかの注文を得ることが出来たのであり、それで成功の見通しも得た。エイブが注文の商品を配達不可能になった時点で、彼は劇の振り

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』（「エイブ・サイモン家族劇三部作」）のテーマと技法（及川）

出しに戻るようになる。もしエイブが通常の固定客を持っていれば、彼らによって充分救われたことであろう。しかし、持っていなかったために失敗した。『彼らもまた立ち上がる』では数人の固定客があり、エイブは彼らが自分の友人として味方についてくれることを信じていたが、ちょうど『セールスマンの死』のウィリー・ローマン同様、エイブはビジネス界の結び付きを過剰評価したのである。

エイブはまず最初、彼の古い顧客のミス・ランバートに電話をかけるが、彼女は彼の救済を断る。マーチャント・トラスト・カンパニーのもう一人の古い友人ホブソンからも、ひどい扱いを受ける。自分のビジネスのやり方を正当化するために息子のベンに使った泣き落とし戦術もホブソンには通じず、話し中に電話を切られてしまう。ついにエイブは彼の最も古い顧客の一人ドーソンに頼み込むが、彼からも他から10パーセント以上の割引で品物が入ると言って、断られる。最後の痛手は、サム・ロスからのものである。ロスの訪問で再び劇が終わる。ロスはベンを娘婿に迎えて彼に事業を引き継がせた後、カルフォルニアで引退生活を送ることを楽しみにしている。カルフォルニア、特にその西部地区での余生はロスのようなビジネスの成功者にとって象徴的な意味を持つ。これは他方、エイブの失敗を際立たせることにもなる。ベンの介入にもかかわらず、ロスはミス・ランバートにすでに二日間で200着のコートを売りさばいたことを明かす。ロスがスト破りを使って配送したことを知ってエイブは激怒し、ロスを家から追い出す。「ロス、あれはうちの注文だったのに」(Act III, Scene II)と言うエイブの問いは、もはや何の意味も持たない。如何なる状況であれ、希望があればそれをあくまで追求すべきで、それが出来ず先を越されたのはエイブの性格的欠陥であろう。ロスが出て行くと、エイブは我に返る始末である。

エスターだけは変化が見られない。「どうしたの、あの人（ロス）は、自分の生活費を稼がなきゃならないと汲々とするイカサマ師なんかじゃないわ」(Act III, Scene II)と言うと、エイブは「生活費を稼いでいる人じゃないさ、エスター、わしにしてみれば、あんなのは生活とはいえんね」(Act III, Scene II)と言い返す。これにはエスターも反論できない。彼女は無言のまま、無表情で何の変化もなく、最終的に舞台を去る。アーノルドは「かあさんをあんな風に行かせてはいけない。あの人には状況がわかっていないんだ」(Act III, Scene II)と主張する。しかし、エスターは理解されじまいである。彼女なりの首尾一貫した態度は、エイブが前作からの改作過程で経験した変貌から目をそらす必要な気晴らしとなる。最後まで家族への義務を全うするという原則は、エイブとエスター両者にとっても、『悪人ではない』と同様、普遍的なものである。この原則を扱う上でこれら二つの劇に見られる唯一の違いは、エイブに代わって、エスターの方が今度はいくらか能弁になっているところである。

『悪人ではない』の最初の部分でエイブの性格を特徴付けていた純真無垢さあるいは抜け目なさといったものは、エスターには見られないが、『彼らもまた立ち上がる』ではエスターは、

最初からよく喋りまたやや喧嘩腰とも思える程の変わりようである。事実、ベンとエステーの幕開けの会話には、両者の対立を窺いがい知ることが出来る。ベンは工場の従業員は、昇給が必要だと言う。エイブもこれには理解を示すが、エステーは反対である。エイブはエステーの父親の同居を快く思わずそれを口にすると、彼女は誰にも迷惑をかけていないと言って父親をかばう。また後には極めて強い調子でアーノルドが父親の仕事を手伝うのは当然だとも言う。エステーの描写を通してミラーは、エステーの父親に対する態度が彼女の唯一の役割であるかのように描いている。スタイン爺さんは耳が遠く補聴器を付けているが、これは誰かが大きな声で喋ると、具合が悪くなる。エステーは父親の体調を心配して、しばしば父親に大きな声で喋る。これは皮肉にも父親には逆作用する。

エステーに比べ、エイブは威厳を持った態度を保ち、息子達に三人力を合わせれば、現状を改善できることを説く。この改作でミラーはエイブを労働者の側に位置付けようとしているようだが、労働者の代表には不適切である。彼は労働者というよりは、矛盾に満ち溢れた悩めるビジネスマンというのがこの劇の彼に与えられたイメージだからである。

ミラーはこの劇で父親と息子の対立をより鮮明にした。30年代の代表的劇作家クリフォード・オデットの『醒めて歌え』も父と子の関係を扱っているが、両者の劇作術には違いが見て取れる。オデットは自己の政治的信念を正当化するために登場人物を使うが、ミラーの場合は登場人物、とりわけ父親の欠点を補うために自分の政治的信念を發揮しようとしていると言える。

### 3. 『草なお茂り』

1938年4月大学四年時に、ミラーは『彼らもまた立ち上がる』を書き直した。ニューヨーク市劇団グループによって上演されることを予想して全体を三幕四場とし、登場人物も12名と少なくなり、前作よりもさらに緊密な構成となった。劇の本質とは無用であったマクシンを省き、新たにこの劇で重要な役割を果たす職工長マックス・シュニヴァイスが、サイモンの工場労働者を代表する。さらに注目すべき改変は、今度はコメディ仕立ての『草なお茂り』になったことである。これはミラーの5番目の作品で、前二作の後に『暁の優等卒業』(1937)と『大いなる反抗』(1938)を書いている。『草なお茂り』が前二作とどう変わったのか、その改作は何を意味するのかを、以下で詳細に考えてみたい。

まず気が付くことは、ミラーの劇作上の稚拙さは見られなくなったものの、奇妙にも『草なお茂り』は前作よりも劇としては質的に劣っているということである。幕尻のト書き「そして、その後、彼らは幸福に暮らした」(Act III)は、これまでのミラーのどの作品にも見られなかった。その点では、他の二作品との関係から眺めると、興味深いものがある。というのは、上述

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』(「エイブ・サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法(及川)の事実は、劇のアクションの論理性が如何に歪められてしまったかを如実に示しているからである。その原因は、専らミラーが父親のアクションの意味を息子の人生に組み込むことに失敗しているからである。

ミラーは前二作の危機的状況を今回もそのまま使用し、前作に登場した数人のいわゆる悪役が演じたアクションをサム・ロスに凝縮している。ヘレン・ロスも前作で見られたセリフのない端役から実際的な役割を演じるより能動的な人物に変えられた。さらに、ベン・エイブ・サムの三者関係も、エイブの工場で帳簿係として新たに登場したルイズとベンを恋仲にし結婚へと発展させ、ベンではなくエイブの弟デビットをロスの後継人とすることで、大幅に変わった。そして、前作に見られたエイブのジレンマとベンの犠牲精神も、医学を学ぶアーノルドをヘレンと恋仲にすることで避けられた。

『草なお茂り』はエイブが疲れて仕事から帰宅する所から始まるが、これは『セールスマンの死』のウィリー・ローマンが帰宅する幕開け場面を予期させる。さらに今度の作品のエイブは以前と異なり、語彙も少なく本も読まず時代を読み取ることが出来ない『みんな我が子』のジョー・ケラーやウィリー・ローマンを思わせる。今度のエイブは前二作に登場する二人を足して2で割った感じの様相を帯びていると言えよう。

今度のエイブは有能なセールスマンに変身し、『悪人ではない』のエイブのように嘘をつく必要は無い。彼は300着のコートを売りさばくが、エスターには信じられない。劇中で最もモノのわかった雇い主である。労働者の組合費もきちんと払っている。サム・ロスのような人間は、町外れのスト破りの経営する店と繋がっているから、自分よりも売上げがいいのだと認識している。彼はまた、従業員の福祉にも気を遣っている。彼の帳簿係ルイズと工場長マックスとは、友達のような関係にある。さらに、ミラーは労働者の苦境は仕事それ自体にあるのであり、以前のように仕事の状況にあるのではないと主張して、エイブを擁護している。エイブが感じる罪意識も彼がどうすることも出来ない状況に対してである。

What do you do with a guy like Max? [Abe asks Ben.] Can I yell at him? Can I throw him out? Sure he went half-blind already on the goddamned machines ... I watched it happen. But did I tell him to lose his eyes? Did I want it? For God's sake, you'd think I wanted his eyes. (Act II)

ミラーがこの劇で行ったプロット上の最も重要な改変は、エイブが最初からロスの不正直とその同情心の欠如に気が付いているということであろう。エスターがエイブに「サム・ロスは金持ちだけど、友人のことを決して忘れるような人じゃないわ」(Act I)と言うと、エイブはわざと当惑して、「エスター、サム・ロスには友達なんかいないんだよ」(Act I)と答えてロスの正体への完全な理解を示す。

先の二作品のエイブと違い、今度のエイブはベンがヘレンと結婚することを望みはしないが、

ロスから金を借りたいので、彼はベンがヘレンに興味がある振りをしてくれることを望む。彼がベンに押し付ける状況は、しかしながら、危険なもので、スタイン爺さん（この作品では、前の二作よりももっと人間らしい性格を与えられている）も、これを理解しており、エイブに警告する。そして劇の後半で、エイブがロスは「歩く帳簿」だと呼んでロスからの財政的援助を断ることになる。というのは、ロスは商売のためにギャングを雇っていて、保守的なエイブはそれを断じて許すことが出来ないからである。エイブはこのことを最初から知っていて、前二作のエイブと異なり、ロスが自分の友達で、また尊敬できる人物であると自分に偽ってまでして、彼との関係を継続することは出来ないのだ。

このプロットの変更は、さらにエイブの性格に興味深い変化をもたらす。『草なお茂り』で、エイブは自分自身を偽らなければならない羽目に陥り、現実の醜さに直面して、彼の自己欺瞞を専ら正当化する。ベンも前二作同様、衣服製造業は自分の好みの職業でなく、エイブもそれを知っているが、その事実を受け入れようとしない。「おまえが、この仕事に向いていないのはわかっているよ、ベン。でも努力してみてください...少なくとも、わしを手伝ってくれ、わしのためだと考えて」(Act II)と言う。エイブは自分がロス以外から資金を借りることが出来ないことを知っており、ベンが彼の感情を抑えてヘレンと結婚してくれることを望みながらも、他方、自分は「正直な人間」なので、銀行が彼に何がしの金を貸してくれるはずだと主張する。だが、彼の自己欺瞞は空回りする。財政は逼迫し、ベンのお金持ちの娘との結婚に希望を繋ぐ。しかしながら、ベンのおへレンへの感情は常にはっきりしており、それを理解するが故に、エイブは他の不可能な解決策、すなわち、銀行ローンへと目を向けざるを得ない。彼の自己欺瞞は誰をも騙すことが出来ず、ルイズもベンに「人はあんな風に自分を騙すことなど出来ないわ」(Act II)とさえ言う。ベンも「自分で自分を騙さなければ、人生なんかやっていけないよ」(Act II)と言いながらも、エイブのやり方の限界をわきまえている。

ミラーはエイブが真実に真正面から向かっていく能力に欠けていることをベンに擁護させ、ルイズにもそれを吐露させているが、これは人生とは結局、自分の手で癒すことが出来ないとする彼自身の人生観を示しているだろう。また、ここで注目すべきは、こうした悲観的人生観がこの『草なお茂り』では、前二作と全く異なる喜劇の様相を帯びて描かれていることである。ベンとルイズを恋仲の関係にしたことでベンのおエイブへの偽善性は薄れ、この二人の恋人が束縛から自由へと開放されて、この劇にハッピー・エンディングが約束された。ヘレンはベンとルイズがお互い愛していることを知ると、彼女は父親が自分の婿としてベンを義理の息子にすることを阻止するため、アーノルドに自分と結婚するよう頼む。アーノルドは承諾し、二人は実際に本当の恋人となり、サム・ロスの許可を得るためにわざと結婚を遅らせる。晴れてベンはルイズと結婚し幸せに暮らすことが可能となった。

サム・ロスは悪徳ビジネスマンのモデルであり、ある意味で『すべての幸運を得た男』のバ

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』(「エイブ・サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法(及川)ターソン・ピーブス、『セールスマンの死』のウィリー・ローマンを彷彿させる。ただ、この劇でミラーはロスステレオタイプ的に描いているが、かなり融通を効かしている。パターンソン・ピーブスやウィリー・ローマンに見せたミラーのテクニク、すなわち自分が誤解をした時のその対処の仕方に関して、この劇ではまだそれが発揮されず、ミラーはロスをしばしばユーモラスに描くことに終始している。たとえば、ロスはアーノルドとヘレンが自分の新車をスピードを出して乗り回していると思って「わしはまだあの車を使い慣らしている最中なのに」(Act I)と言って、エイブと次のようなやりとりを行っている。

Abe: So it breaks in faster.

Roth: No, you don't understand how it works, Abe. You ain't allowed to run it faster or ...  
or if y'do, y'understand, the gasoline don't develop, y'see. (Act I)

ここには、またミラーが自分の利益以外何も興味を示さない独り善がりな人間としてロスを描いていることが見て取れる。結局、ロスの生き方の動機となっているものは、金銭欲のみである。この後に続くウィリー・ローマンなどの主人公達は、ロスとは違って金銭的欲望よりはむしろ人生の不安に苛まれている。ミラーの人物描写は、総じて観客に劇の楽しさを喚起し、そのために登場人物をかばうところが垣間見られる。『草なお茂り』までは、ミラーの悪人達は、舞台内あるいは舞台外であれ、世渡りにはどちらかと言えば積極的で、その生き方には明らかにサディステックな動機が隠されていた。ロスの世間との関係は、『草なお茂り』に関する限り受動的である。ロスの無関心さを良く表しているのは、ベンがつかの間にロスの申し出を受けた直後にロスがルーズに見せた次のような態度である。ルーズは目に涙を溜めて走り去り、ベンがその後を追う。

Roth: Is that his girl?

Abe: Yeah.

Roth: Well, that's the way it goes. Love is a terrible thing. (Act II)

ロスは他人の動機や価値観を認識はするが、それらが自分には何も影響を与えることは無いと考える。それは彼の人生観だとも言える。エイブの弟デイブ・サイモンに対するロスの態度は、それを表す好例であろう。デイブはロスの会社で働いているが、そのロスはかつてスタイン爺さんのために働いていた。これらの関係から、ロスはエイブとの関係を特別なものと感じていいようなものだが、彼は二人の関係を今以上には発展させようとはしない。ロスはエイブに約束したにもかかわらず、デイブにきちんとした給料とまともな仕事さえ与えていない。彼は自分がサイモン家に有する優位な立場(エイブに金を貸せる立場)を決して認めようとはしない。

義理の息子に自己のビジネスを継いで貰うというロスの願望は、エイブがベンに自分のビジネスを譲り渡したいとの願望のパロディともなっている。また、エイブは幕尻で二組の若者達

が散歩に出掛けるのを見てエステルに「さあ我々も彼らのように新鮮な空気の中を歩こう。草なお茂り、木々はなおそこにある。そしてお天道様はまだたっぷり拝めるんだ。何を待っているんだ。佇むことなく時と共に歩こう」(Act III)、「我々は時間よりも、もっと使うべきものを持っている。わしにはまだ立派な両手が在る。心臓はまだ丈夫だ、それで充分だ」(Act III)と述べるが、これもアーノルドのセリフ「草や木と同様、すべてを単純にやればいいのだ。そうすりゃ永生き出来るさ」(Act II)のパロディーと取ることが出来よう。そして、これは『草なお茂り』全体のテーマの総決算と言っても過言ではないであろう。町一番の金持ちの一人の娘と結婚する医者志望の息子を持つ父親としてのエイブの立場は、労働者の生き方の代弁者には相応しいものではない。その息子達は父親を負債から逃れさせ、さらに、商売上の犯した罪からも逃れさせて利益を手に入れさせているからである。こうして、ミラーは『草なお茂り』をコメディのみならず、空想的作品へと変貌させたのである。

他の登場人物に目を向けてみると、彼らは簡単に無視されうる存在であることがわかる。エステルの役割は前二作の時よりも、かなり軽減されている。前二作同様、彼女は疑い深く感情の起伏に富む人物として描かれてはいるが、この作品における彼女の感情的な側面は比較的抑えられている。エステルのヒステリックな面を強調する代わりに、ミラーはそれをト書きの説明にとどめている。エステルがエイブのビジネスについての秘密主義に抗議すると、エイブは「喋るとおまえはいつも常軌を逸する。それが理由さ。おまえが惨めだとわかっていても、わしには他に心配しなきゃならないことがわんさどあるのさ」(Act I)と言って、自分の口の固さを正当化する。エイブが認めるように、エステルは夫の秘密主義を次のようにこぼしている。

What is happening in this house [she cries out]. I live here but nobody talks to me. Am I really so stupid? I've got some brains too ... Why don't you tell me something? (Act I)

『悪人ではない』や『彼らもまた立ち上がる』でエステルを忘れられない存在にさせているのは、彼女の純粋な怒り・憤りであったが、『草なお茂り』では子供達への心配に終始している。また、ビジネス界に関する彼女の無知が強調されているので、エステルはこの作品では何一つ責任ある役割が与えられていない。これはやはり、この作品の限界と言わねばならないであろう。

『草なお茂り』の最大の特徴の一つは、アーノルドとベンの関係がエステルと彼らの関係よりもより親密になったことである。アーノルドはベンがいみじくも「いつも正しいさ」(Act II)と言うように、真実の代弁者の役割を与えられている。彼は直接、観客に向かって次のように語っている。

People, people, when in the hell are you going to learn that it's entirely up to you! When will you stop this waiting for? This is not the movies, People. (Act II)

しかし、ベンがアーノルドの上に行く役割を与えられているのは言うまでもない。モノ書きを

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』（「エイブ・サイモン家族劇三部作」）のテーマと技法（及川）  
諦めたわけではなく、ベンも自分自身の純真無垢さを自認するが、次のセリフにはそれが如実に表れている。

I'm no good for writing [he tells Arnold]. And I think I'm not very good for the world either. I'm too sentimental. I look for a loveable trait in everybody and when I find it, I hang on to it for dear life. That is, I have no perspective because at the time of my life when I should have been learning to hate small things within reason, I was pulled out of boyishness and dumped into a business where the things to hate are much, much too big for a boy with nerves, so I fell back on a weltanschauung that has blinded me to hate and to perspective, and the result? I cannot appreciate real evil ... Arnold, I'm afraid you're looking at a fool and a boy who is growing into an old man ... but without wisdom. (Act I)

後にアーノルドはベンのこの言葉に同意し、ベンに遅く訪れた思春期が、たとえそれが「少年らしさ」からの脱却であったか否かは別として、人間誰にもあることだと慰めの言葉を吐露する。とにかく、『草なお茂り』から我々が受ける最大の印象は、ミラーが愛や痛みを含む自己の人生経験に忠実に従いながら、主人公がリベラルな考え方を具現化して行く過程を劇化することの難しさを味わっていたということである。

## おわりに

ミラーは他の多くの作家同様、自己の実体験を作品に色濃く反映させている。実体験の中で特に彼が衝撃を受け、その後の人生に多大な影響を与えたのが1929年10月の大恐慌であり、「私は当時、本をあまり読んでいなかった。大恐慌は私の書物であった」<sup>5)</sup>と述べているように、大恐慌は文字通りミラーの思索の原体験となった。彼の父は衣服製造業者として大恐慌前までは成功していたが、この後、商売は低調となって倒産したのであった。この一家の体験を描いたのがこれまで見てきた初期未出版劇「エイブ・サイモン家族劇三部作」である。そして1980年には、30年代不況期を扱った同じく自伝的な『アメリカの時計』を発表した。ミラーが大恐慌時代の30年代に帰ってこのテーマに執着する理由とそれをそれぞれの作品でどのように技法的に発展させたかを比較検討し、ミラー劇の主題の一貫性と創作態度を考えてきた。

これまで個々に論じてきた「エイブ・サイモン三部作」の共通点を纏めると 自伝的色彩が濃厚 大恐慌と30年代の不況が背景 資本家と労働者の対立（中小企業家の生き方の追求） 劇作術の実験 家族劇のパターンの創造 主題としての父親と息子の対立を挙げることが出来よう。これらはブロードウェイ・デビュー後の諸作品において受け継がれるミラー劇の特徴である。さらに、ここで改めて「三部作」それぞれを劇作術の点から比較検討してみると、次のような変化を見て取ることが出来よう。『悪人ではない』は30年代の不況の中で悪戦

苦闘する中小企業の家族をリアリスティックに描いた点で極めて興味深いですが、十分に劇化されておらず当時のイデオロギー的図式によって描かれた生硬さが見られる。その点、『彼らもまた立ち上がる』では、人物描写が前作よりも細部がリアルになった。

『彼らもまた立ち上がる』はニューヨーク公立図書館のものが研究書で知られているが、私の2000年度の調査でテキサス大学オースチン校のリサーチ・ライブラリーで、これとは別のものを目にする事が出来た。すでに述べたミラーのミシガン大学時代の劇作クラスの先生であったケネス・ロー教授が書いたミラーに関する論文<sup>6)</sup>で言及されていた原稿はこちらの方であり、その所在が明示されていなかっただけに、それを目にする事ができたのは収穫だった。<sup>7)</sup>この作品で特に問題となるのは第二幕第三場で、今度のテキストでは、その最後の部分は商売の仕方に対する祖父スタインの忠告を無視するエイブに祖父が激しく不満をぶちまけ、この祖父にエイブが手を上げたことが、彼の心に鋭い罪の意識を植え付ける。この罪の意識は以後のミラーの作品の大きなテーマとなることを考慮すると、この作品がミラー劇の系譜の中では決して見逃すことの出来ない重要な位置を占める。

『草なお茂り』は前二作とはがらりと異なり、これまで舞台上に緊迫感を与えていたストライキの場面や厳粛な悲哀感を持った祖父の死と葬儀の場面は無くなり、喜劇的な作品になっている。リアリスティックで簡素な悲劇的雰囲気を持って、一層メロドラマ性の強いものになった。元来、素朴なヒューマンズムがミラーの変わらぬ人生態度であり、この作品ではその態度は理想的な形で父エイブに体现されている。『悪人ではない』の不安な父、『彼らもまた立ち上がる』の頑固一徹な父は、『草なお茂り』では目覚めた父となり、不況時代に苦悩した父親達の賛歌となっている。<sup>8)</sup>前二作で見られた中産階級意識の持ち主としての父親エイブと社会変革意識の持ち主としての息子アーノルドとの対立、そしてその間にある苦闘するベンの姿も、『草なお茂り』ではずっと抑えられて結婚「祝祭劇」の様相すら帯びている。

他方、『アメリカの時計』では、ボーム家の私生活は大きな意味の「アメリカの家族」の生活となり、まさに「アメリカの時計」はアメリカの歴史を刻むことになった。ミラーはアメリカが現在の困難な状況を克服するために、あの「不況時代」をいつまでも認識し忘れないようにとの願いを込めてこの劇を書いたように思われる。注目すべきは、『アメリカの時計』ではこれまでの作品と違って、父ではなく母が重要な位置を占めている。ミラーはアメリカを母口と同じように、大地の母、生命の母の権化としてアイデンティティを持ったものと見なしている。この作品はこうして「エイブ・サイモン三部作」とは打って変わって、母親賛歌に変貌したのである。ミラーは繰り返し大恐慌の体験を、南北戦争後の南部の経験や第二次世界大戦と共にアメリカ人にとって大きな経験であると語っているが、ミラーが家族やアメリカまた広く人類を追求するとき、大恐慌とその後の不況の体験は異常なエネルギーを生み出し、彼の創造活動となって爆発するのである。ミラーは大恐慌の体験を振り返るのではなく、そこに常

アーサー・ミラーの初期未出版劇『悪人ではない』、『彼らもまた立ち上がる』、『草なお茂り』(「エイブ・サイモン家族劇三部作」)のテーマと技法(及川)に立ち戻って行くのである。それが、大分あとになって『アメリカの時計』を書いた理由でもあるのだ。

## 注

- 1) *Timebends: A Life*, Arthur Miller, (New York: Grove, 1987), p.91.
- 2) “Shadows Cast Before,” Kenneth Rowe, *Arthur Miller: New Perspectives*, ed. by Robert A. Martin, (N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1982), p.15.
- 3) “The Shadows of the Gods,” Arthur Miller, *The Theater Essays of Arthur Miller*, ed. with Introductions by Robert A. Martin and Steven R. Centola, (New York: Da Capo Press, 1996), pp.176-177.
- 4) 使用したタイプ原稿は、次のものである。*No Villain* (unpublished ms., Michigan), *They Too Arise* (unpublished ms., no. 9a, Texas), *The Grass Still Grows* (unpublished ms, no.9, Texas) 本文中での作品からの引用は、以下それぞれ幕および場で示す。なお、本論文作成において次のPh.D論文も参考にした。*A Study of the Changing Family Roles in the Early Published and Unpublished Works of Arthur Miller*, Dwain Edgar Manske, University Microfilms International, The University of Texas at Austin, 1970.
- 5) “The Shadows of the Gods,” p. 177.
- 6) “Shadows Cast Before,” pp. 13-20.
- 7) テキサス大学オースチン校の所蔵するタイプ原稿には1935年の日付があり、ニューヨーク公立図書館(リンカーン・センター内)所蔵のものより一年前に書かれたことがわかる。おそらくケネス・ロー教授の作劇術のクラスで書いたものと思われる。
- 8) 『アーサー・ミラー 劇作家への道』, 佐多真徳, 研究社, 昭和59年, 97頁。

## *The Abe Simon Family Trilogy*

The Great Depression in 1929 gave young Arthur Miller a big shock. It is a starting point in his thought and writing. He wrote *The American Clock* based on the ordeal his own family experienced during that time. Before this, Miller wrote three plays, *No Villain*, *They Too Arise* and *The Grass Still Grows*, all modeled also after his own family in the 30s. This shows how deeply he has been influenced by the Great Depression. This paper, first of all, throws light on the changes and developments made in this trilogy in terms of its themes (strife between capitalists and laborers, survival of businessmen, conflict between father and son) and techniques (plot, construction, action, character description). It, then, discusses the relationship between the trilogy and later family plays and also touches upon the similarities and differences between the trilogy and *The American Clock*.

Since *No Villain* is written on an ideological note in favor of socialism prevalent in those days, it is simple and unsophisticated both in its character portrayal and theme development. In *They Too Arise* each character has become more realistic. In the manuscript in the University of Texas, Abe's guilt toward Grandpa Stein is mentioned, which wasn't in the other one in the New York Public Library. Since the theme of guilt is a main theme in Miller's major plays, the U T manuscript has an important meaning. *The Grass Still Grows* is different from the previous two plays with no strike scene and also no solemn and sorrowful scenes of the grandfather's death and his funeral. Furthermore, the whole play has become rather comic. Abe of *No Villain* and *They Too Arise* has become an enlightened father in *The Grass Still Grows* and it could be called a song in praise of the suffering fathers during the Depression as opposed to the mother, Rose, as in *The American Clock*. Miller must have written it to convince the American audience never to forget the hardships of the 30s, and portrayed Rose as Mother Nature or personification of life. When Miller searches for the fate of Americans or humans at large, the experience of the Great Depression generates enormous energy for his creativity.

( OIKAWA, Masahiro 本学部教授 )